
飴玉

椿屋きゅうり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飴玉

【コード】

N8229U

【作者名】

椿屋きゅうり

【あらすじ】

同じ研究室に所属している無口な彼女が見せた、小さなエロスの物語。

「ねえ、飴とかガムとか持ってない？」

と、同じ研究室で働いている女性が訊ねてきた。彼女は僕と同期の人間だ。彼女は言動がぶっきらぼうで、表情があまり変化しないことから、周囲の人間からは「鉄仮面」だとか「キカイダー（メス）」などと呼ばれている。

表情の変化が乏しいことだけに着目すれば、別に「モアイ」という名称がついてもおかしくないのだが、彼女の顔はモアイと呼ぶにはふさわしくないほどに整っていた。モアイの顔が現代の美少女フィギュア並に可愛ければ、もちろんそれは無口なキャラで凜とした涼しげな表情をしているものに限る。話は違ってくるが、そんな美少女モアイなど聞いたことがなかった。

鉄仮面やキカイダー が可愛いのかと聞かれれば、鉄仮面やキカイダー には想像の余地がある分だけ、モアイよりは彼女にふさわしい呼び名なのかもしれない。そうだとすると酷い呼び方だということには変わりないのだが……。

ちなみに、僕は心の中で彼女のことを「長門」と呼んでいた。まあ、僕の彼女に対する呼び方は気にしなくていい。長門は無口で凜とした涼しげな表情をしている美少女だということだけを記しておく。

ここでは仮に、無愛想な彼女のことを「彼女」と呼ぶことにする。

「飴なら引き出しの中に入ってるよ。べっこう飴だけだね」

「べっこう飴？ あの紅茶の味があるヤツ？」彼女がこちらを振り向いて質問してきた。彼女にしては珍しい行動だった。べっこう飴、好きなんだろうか。

「ああ、アレじゃないけど。砂糖を煮詰めただけの、シンプルなべっこう飴だけが入ってる袋を買ったから。紅茶味はないな」

「……そう」

彼女の声は残念そうだった。

紅茶味が好きなんだろうか。紅茶とオリジナルの2種類が入っているべっこう飴は、表面が滑らかで舌触りが非常にいいのだ。これはマメ知識である。

「まあいいわ。そのべっこう飴、貰える？」

「もちろん」そう言って僕はべっこう飴の入った袋を彼女に手渡す。「最後のべっこう飴だから、ついでに袋もそのゴミ箱に入れといて」

「えっ」彼女は少し驚いた声をあげて袋を受け取った。顔は無表情のままだったが。「最後の1つだったの？」

「うん、まあね。僕は飴が好物で、よく舐めてるから。すぐになくなっちゃうんだよね」

「大丈夫？」彼女は申し訳なさそうだった。飴が僕の好物だと知って、その最後の飴の一粒を食べてしまうことにためらいが生じたのだろうか。「私、これ舐めちゃうけど」ああはいそうですか、食べるんですね。

「どーぞどーぞ。また今日の帰りにでも買いだめしとくから」

「そう……」彼女は一瞬僕に視線を合わせ、またすぐに目を逸らした。なんだそのぱつと視線を動かしたらイヤなものが視界に入ってしまったためにまたすぐに視線をずらしました的な挙動は。傷つくじゃないか。

「それじゃ遠慮無く頂くわね」彼女はそう言って飴を包んでいたフィルムをはがし、小さな口の中にはちみつ色のべっこう飴を放り込んだ。確かに遠慮のない動きだった。僕に対する感謝の気持ちはないんだろうか？ でも僕は彼女のその動作に若干のエロスを感じた。べっこう飴の1つや2つなら、あの小さな口にもっと突っ込んでみたいと思った。いや、べっこう飴の1つや2つなら安いもんだと思った。あれ、一応言い直したけどこれアウトじゃない？

彼女はむすつとした表情のまま飴をカラコ口と口の中で転がしているようだった。白いほっぺたが左右交互に膨らんでいた。まぶた

が半分おろされた目は、蛍光灯の光を受けて輝いていた。

「あ、このべっこう飴も結構美味しいわね」彼女は表情を変えな
いままそう呟いた。

当たり前だ。わしの選んだ飴はどれも一級品なのじゃ。スーパー
に売ってるようなどこにでもあるようなもんだけどね。「まあね。
飴には多少なりともこだわってるから。美味しい飴なら大体把握し
てるよ」スーパー限定でな！

「へえ。それじゃあの紅茶味のべっこう飴も知ってる？」今日の
彼女はよくしゃべる。顔は無表情のままだけど。

「もちろん知ってるさ。あれはツルツルしてて、なんとというか舌
触りがいいよね」

「あー、なるほど。それは分かるわ」彼女はわずかに首肯した。

「ほかにバタースカッチやチャオなんかは美味しいよ」僕はに
っこりと笑いながら話を続けた。「今度また買ってこようと思うん
だけど、食べてみる？」

彼女の口の動きが止まり、カラコロという飴を転がす音も止んだ。
なにか逡巡しているようだ。何を考えているんだろう？ だけど、
それが僕に分かるはずもなかった。

そしてその少し後、「うん、食べてみる」と彼女は言った。そし
て飴の奏でるカラコロという音も再び聞こえ始めた。

会話はここで途切れた。ちようどいいタイミングだということだ
ろう。

僕も彼女も、どちらからというわけではなく、机に向かい研究資
料を読むことに集中し始めた。しかし、僕はなかなか資料に集中す
ることができなかった。僕は自分で自分の顔が少しにやけていると
いうことが分かった。

今日はあの無口な彼女と話せたことで、僕の気持ちは少なからず
浮ついていた。無愛想であろうとなんであろうと、女の子と話すと
男子の気持ちは浮かれてしまうものだ。これは生物学的に仕方ない
ことだと僕は思っている。

まあ、その女の子が、もし仮に、自分の好みのタイプだとしたら、気持ちが浮ついてしまうぐらい当然のことだ。べ、別に、鉄仮面orキカイダーが僕の好みと合致しているとか、そういうわけではない。いやだから、本当にそういうことじゃないんだから！

と、そうやって僕が一人で幸福な気持ちを噛み締めていると、肩がとんとんと叩かれた。

なんじゃらほい？ と僕が振り向くと、そこには無愛想な彼女の顔があった。拳1つの距離しかない、とても近い位置に。

彼女は、相変わらず目は半開きで眠そうだし、ほっぺたは白くて綺麗だし、唇はわずかに赤く湿っていて、だけどなぜ、その唇の先に、溶けたべっこう飴をくわえているの？ お腹いっぱいですか？

「あんた、べっこう飴好きなのひよね」べっこう飴をくわえているため、彼女の発音は不明瞭だった。

「はひ、好きでひゅ」僕も緊張と混乱で発音が狂った。Oh,shit!

「じゃ、あんたにもコレ、分けてあげるわ」
What? 何を僕に分けてあげるだつて？

彼女の顔が僕の顔に近づくる。え？ あ、ちょっと待って、それって。

そして、彼女の唇が僕の唇に重ねられた。彼女の唇は、柔らかく、しっとりとしていた。それと同時に、彼女の舐めていたべっこう飴が、僕の口内に滑り込んでくる。

そのべっこう飴はとても甘かった。だけど僕には、それがべっこう飴を構成している砂糖による甘さなのか、彼女の魅惑的かつ官能的な行為によって脳髓が痺れて体全体が甘くとろけてしまったことによる甘さなのか、その判別がつかなかった。

彼女はすぐに唇を離れた。名残惜しいという気持ちなど全く感じさせないような動きだった。事実、彼女の表情には全くの変化がなかった。普通、ここは少しでも顔を赤らめるものではないのか？ クールなキャラでもここはきやあ恥ずかしいという気持ちを見せる

べきでは？

「何啞然とした顔してるの？」彼女が僕の呆けた顔を見て言った。

「ああ、いや……。飴、甘いなと思って」あとは思考能力が変に冴えているというか、鈍っているというか、なんというか。

「飴が1つだけ余ってた。私はそれを半分なめた。だから、あとの半分はあなたのもの。ただそれだけのことでしょ？」本当に、ただそれだけの理由で飴の口移しを行いました、という顔を彼女はしていた。美少女モアイ、恐るべし……。

「ああ、なるほど……確かにその理由なら、うん、なんというか納得だわ……」全然納得してないけどね……。

「それじゃ仕事に戻るわよ」彼女はそっけなく言った。「飴、ありがとね」

「ああ、どういたしまして」というか僕がありがとというべきなのだろうか？ だけど、それを言っても彼女は何のことでお礼を言われているのか理解してくれない気がした。彼女はとても変わっているのだ。とても論理的で、それに心も体も忠実なようだった。

彼女が研究に没頭し始めたので、僕も自分の研究をしないわけにはいかななくなかった。とりあえず机に向かってみるものの、集中できるわけがない。僕の顔は、軒先で女性用下着が保されているのを発見した下着ドロボーのようににやけていた。ようは最悪なにやけかたをしていたということだ。

僕は先ほどの彼女の唇の柔らかさを思い出しながら、彼女の口の中で半分になったべっこ飴を舌尖でカラコ口と転がした。そのべっこ飴はとても甘かった。

そしてその甘さは僕の頭を刺激し、僕にとっても素敵な考えを思い浮かべる手助けをしてくれた。

そうだ。もし、これからも飴を買ってきて、最後の1つを彼女にあげると言えば、また、口移しをしてもらえるんじゃない？

ハラショー！！と、僕は椅子を後ろに勢いよく吹っ飛ばしながら立ち上がった。吹っ飛んだ椅子はそこから辺にあった適当な機材を

粉碎し、辺りに破砕音を轟かせた。僕のハイになった頭は周囲のこ
とを気にかけている場合ではなかったが、彼女が無表情なままこっ
ちをじっと見つめてきたのに気がついて、いくらかクールダウンし
た。じっと誰かを見つめる彼女の行為。それは彼女が迷惑している
ということ伝えるときのサインだった。

僕は申し訳なさそうに苦笑いしながら、壊した機材を適当にまと
めて適当なゴミ箱に捨てた。彼女はそのことでまた僕を無言のまま
に見つめてきたが、今はその視線に僕の視線を絡めている場合では
ない。そんな情熱的な視線を送られても困ってしまうじゃないか！

僕は今すぐ、可及的速やかに、彼女に飴の口移しをしてもらった
めの行動計画を立てなければならぬのだ。

どうやらこれから、僕の研究はよりいっそう忙しくなりそうだっ
た。

(後書き)

なんで書いたのかよく覚えていない作品です。女っ気のない現実に嫌気がさした時に書いたものかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8229u/>

飴玉

2011年10月7日04時23分発行